

## 土方 寧

英吉利法律学校の伝統を守り続ける

出身地 高知県高岡郡佐川町  
 生年 一八五九（安政六）年二月十二日  
 没年 一九三九（昭和十四）年五月十八日

高知県佐川町の酒蔵の並ぶ通りを山側に外れた「奥の土居」と呼ばれる小高い場所に、土方寧の育った家がある。今は佐川町の史料館である青山文庫が建っている場所である。その庭園は九如園くじょえんといい、土方家の回遊式庭園がそのまま残されたものである。

土方家は、土佐山内家の家老で佐川一万石領主の深尾氏に代々仕えていた。父は土方左平直行さへいななおゆき、雅号を左平に因み茶坪さへいといい、書画を能くした。戊辰戦争に従軍し、明治政府では弾正台をはじめ大阪府、司法省へと出仕し、一八七七（明治十）年元老院少書記官で退官している。左平は、当番の日に酒を飲んで吹上御苑で昼寝をしていて明治天皇に見咎められたり、御前会議の場で放屁したなどの話が伝わるほど奔放、気ままな人柄であった。左平の依願免官は四十六歳で、土方寧十九歳春のことであった。

寧はこの年九月に東京大学予備門に入学することになった。寧は手形法や会社法などを中心に英法を講義した。彼の日本民法とイギリス法の特徴を講じつつ、後者の長所を説くその講義は雄弁滔々ゆうべんたうたうとはなはだ長くなるが、その趣旨は「精細明瞭」と回顧されるものだった。

本学が東京法学院、東京法学院大学、中央大学と大きく変わっていく中、本学のイギリス法の研究と教育は一種独特なものとされた。単にイギリス法を学んで十分とせず、同時に英語英文に堪能でなくてはならないとして、試験・解答はすべて英語英文を用い、平素の教材にも英語英文を課していたため、他校には見られぬものがあった。この特色ある創立以来の中央大学の教育体制の中心に土方が座っていた。



土方寧

創立二五年を経てさらに飛躍しようという一九一二  
 年、本学は名実ともに  
 に大黒柱であった菊  
 池武夫学長を喪つ  
 た。後を受けた奥田  
 学長のもと、土方は  
 江木衷とともに大学

る。当初は自費で修学していたものの、翌年一月には左平から「昨年免職以来私儀モ追々窮迫本月ニ至リ忽ち学費支給仕兼候」として給費願いが出され、給費生になっている。この時を始まりに、土方はたいへん苦学をすることになった。土方が学生の頃、のちに法學文獻出版の老舗となる有斐閣は、古書籍を扱い出版にも事業を揚げつつあった頃であった。この有斐閣創業者の江草斧太郎えくさおのたは学生の面倒をよく見ていたが、土方は江木衷や奥田義人、山田喜之助、岡野敬次郎らとともに有斐閣からの借金の常連であったという。また土方は、在学中にイギリス留学を希望していたが、左平の借財などのことも関係してか、早く就職することが望まれており、実現しなかった。彼のミドルテンプル留学は、大学へ就職後、助教授として八七年から九〇年のことであった。この三年間で彼はイギリス法はもちろん、イギリス紳士風の鱒釣りや狩猟という趣味も身につけ生涯のものとしたとい

英法科教育の改革を行った。日本の法制度を考える時ドイツ法学研究の必要はもちろんであるが、「実地応用の妙を極」めているのはイギリス法であってこの長所を学ぶことは建学の主旨であり、「実地応用の神髓」を修得し、以て社会に活躍する人材を養成するという英吉利法律学校創設以来の伝統と教育方針を再確認しつつ、ともすればおろそかにされているイギリス法の総体をきちんと教授するための体制を作り直そうというもので、カリキュラム編成と教科書や講師選定は土方の手で行われたのである。

土方は、東京帝国大学の法科大学長にもなり、貴族院議員にも勅選されたが、やはり演説は長く、「土方（とほう）も寧（ねえ）」と揶揄されたというが、少しも意に介さなかったという。講堂で言いたいだけのことは言い、後は椅子の上にもふんぞり返って眠っていたという父親譲りの直情径行、茶目っ気たっぷりな土方は、創立者として最後まで現役で教壇に立っていた人であり、実に英吉利法律学校の創立精神を昭和にまで伝えた人物でもあった。